

宣教師の日本語理解力について

成 田 勝

- 一 巡察師アレサンドロ・ヴァリニャーノの来日と豊後での布教状況
- 二 五名の聴罪司祭の日本語理解力
- 三 日本人修道士の寄與と教育機関の設置

一 巡察師アレサンドロ・ヴァリニャーノの来日と豊後での布教状況

一五七九(天正七)年七月巡察師アレサンドロ・ヴァリニャーノは島原半島の南端口ノ津に到看、日本での第一歩を印し、同年十二月新しい形式の「日本年報」を作成させた。これは一六三〇年代に迫害によって日本からの通信が断絶するまで続いた公開性の日本イエズス会報告書のモデルとされた。巡察師はこのほか日本布教区を都、豊後、下の三教区に分かつこと、聖職者養成のための教育機関としてセミナリオ、修練院、学院(コレジオ)を設置することおよび「日本布教長内規」を定めるなど日本における布教の組織化、制度化をはかり、その基本的なことから決定したのち、大友宗麟に会うことを目的のひとつとして一五八〇年九月、全日本布教長であり豊後の上長でもあったフランシスコ・カブラル司祭のいる豊後に向けて出発したのである。

當時豊後では二年前の天正六年日向耳川の合戦で大友軍は島津軍に大敗、領国内に田原親宏、田原親貫、田北紹鉄の不穏な動きがみられ、また宗麟と義統の不和などもあったがそれも次第に鎮静化の方向に向いつつあった。

これより三十年ほど前の天文二十(一五五一)年府内(現在の大大分市)にフランシスコ・サビエル師の来訪があり、このときすでに国主であった宗麟は、サビエル師の高徳と人格に大きくうたれ、同師の出国に際してはイエズス会の布教保護権者であるポルトガル国王への親書、贈物を託し、またポルトガルのインド総督への表敬のために家臣を同行派遣するなど外交的な接触をはじめた。

天文二十一(一五五二)年にはサビエル師とともに来口したバルタサール・ガゴ司祭に領内での布教が許可され、山口から府内に赴いてきた同司祭はジョアン・フェルナンデス修道士とともにその最初の年に「府内の市とその周辺で三百名ないしそれ以上の人達に授洗する」⁽³⁾など豊後での布教活動がその緒についていたのである。

弘治元(一五五五)年にはルイス・ダルメイダによる育児院やイエズス会の住院が設立され、二年後には大内氏の滅亡によって山口から府内に移ったコスメ・デ・トルレス司祭によって全日本の布教本部が府内に置かれ教勢が次第にひろがってゆく。しかし国主をはじめ各地の豪族などの支配階級は関心がうすく、キリシタンになる者は「貧しく身分の低い人たちだけ」という有様でこのことはイエズス会の「上から下へ」とする布教方針に沿うものではなかった。

サビエル師に接して以来、イエズス会に対して絶大な好意を示しつつづけそのことで宣教師から高い評価を受けながら「唯一の大なる欠点はいかに勤むるも、デウスのことをきき、われらが遠隔の国より来りて日本に弘布せんとするところを根本より知らんとするにいたらざる」⁽⁵⁾宗麟自身の受洗は、結局天正六年の日向出兵をまたなければならなかった。しかし宗麟のキリスト教への帰依に対する世評はきびしく「国主(宗麟)のごとく学問あり、日本の宗旨に通じたる人が心を変ずることあるべからずと言ひて、これを不可能なることと考えたり」⁽⁶⁾とルイス・フロイス司祭がいつているところからみると、宗麟の受洗が豊後の内外に大きな衝撃を与えたであろうことは容易に想像されるのである。

「われら豊後におること二十五年以上に及びしもキリシタンの総数は漸く二千人に達するにすぎず、しかも身分低く貧窮にして、病に罷り治療を受くるためパードレ等の設けたる病院に來りし者なりき。従つてわが教は病傷者、下賤にして卑しむべき者の奉ずるものとして大いに軽蔑せられた⁷⁾」が、今や宗麟の帰依によつて情勢が一変した。巡察師ヴァリニャーノが豊後を訪れたのは、このような情勢のもとにあつた天正八（一五八〇）年のことであつた。

註 (1) 九州で大友領を除く地域。

(2) ヴァリニャーノ 松田毅一他訳「日本巡察記」（昭和五十三年 平凡社）二百五十四頁。

(3) ルイス・フロイス 松田毅一、川崎桃大訳「日本史六 豊後篇一」（昭和五十三年 中央公論社）百十九頁。

(4) 一五五七年十一月一日「弘治三年十月十一日」付、イルマン ルイス・ダルメイダが日本よりパードレ・メストレ・ベルシヨール・

ヌネスに贈りし書翰（村上直次郎訳、柳谷武夫編「イエズス会士 日本通信」（上）昭和五十三年 雄松堂）。

(5) (6) 一五七八年十月十六日「天正六年九月十六日」付、パードレ ルイス・フロイスが臼杵よりポルトガルの耶蘇会のパードレおよび

イルマン等に贈りし書翰（村上直次郎訳、前掲書（下））。大分県史料⁸⁾大友家文書録⁹⁾百四十三頁。

(7) 一五七九年十二月十日「天正七年十一月二十二日」付、パードレ フランシスコ・カリヤンが口ノ津より耶蘇会の総会長に贈りし書

翰（村上直次郎訳、前掲書（下））。

二 五名の聴罪司祭の日本語理解力

一五五三（天文二十二）年の「インド管区在住の司祭および修道士名簿¹⁾」によると、「支那」にはフランシスコ・サビエル師が、「日本」にはサビエル師に同行來日したコスメ・デ・トルレス司祭とジョアン・フェルナンデス修道士のほか一五五二年九月豊後に着いたバルタサル・ガゴ司祭、ペロ・デ・アルカセヴァおよびデュアルテ・ダ・シルヴァの両修道士を合せて五名となっている。以後宣教師の数はわずかながらも次第にふえて一五六三年²⁾（永祿六年）には司祭四名修道士五名の計九名

一五七六⁽³⁾（天正四）年では司祭十八名、修道士十四名の計三十二名と増加し、三年後の一五七九⁽⁴⁾（天正七）年にはさらに大きくふえて五十五名（うち日本人修道士七名）となっている。

これを国籍別にみるとすでに述べたようにイエズス会がポルトガル系の修道会であるため当然のことながらポルトガル人が三十四名と圧倒的に多く、以下スペイン人七名、イタリア人七名、日本人七名（ただし修道士のみ）となっている。時代が下るに従ってイエズス会内のスペイン人の勢力が強くなり、十七世紀に入ってスペイン系の修道会であるフランシスコ会などが来日することによって背後にあるポルトガル、スペイン両国の力関係や世俗的な利害⁽⁶⁾がからみ、加えて日本人イエズス会士の問題⁽⁷⁾などイエズス会の統轄は難しくなってくるが、天正十五（一五八七）年の宣教師追放令前後の段階では問題が深刻化するまでにいたっていない。

さて名簿では各会士別に国籍、年令、イエズス会在会年数、在日年数、役職、性格、健康状態、日本語の理解力、配置および誓願等⁽⁸⁾について記載しているが、ここでは布教開始以来問題になっていた宣教師の日本語の理解力をオルガンティーノ、バスターン・ゴンサルヴェス、ルイス・フロイス、ベルヒオール・デ・フィゲイレド、バルテサル・ロペスの五名の司祭についてみたい。これらの司祭は一五七六年の名簿で「日本語による「贖罪師」⁽⁹⁾とされており、告解者であるキリシタンと日本語によって意志の疏通ができ日本語の理解力が最も優れていた人達であったと考えられるからである。⁽¹⁰⁾

以下五名の司祭について、より詳しい記述のある一五七九年の名簿をみるとつぎのとおりである。

オルガンティーノ司祭 イタリア人、年令約四十五才、イエズス会在会約二十年、三誓願修士、寛容である。日本在住十年。日本語はほどほどに解る程度、都地区^{スベリヤール}の上長である。

バスターン・ゴンサルヴェス司祭 ポルトガル人、年令約四十五才、イエズス会在会二十年以上、三誓願修士、健康である。

日本在住九年、日本語をよく理解し、話すことも告解を聴くこともできる。平戸の住院所属。

ルイス・フロイス司祭 年令四十八才、イエズス会在会約三十年、豊後地区の上長、いたって如才がない。持病があつて蒲

柳の質。日本在住十六、七年、日本語を非常によく理解する。

ベルヒオール・デ・フィゲイレド司祭 インド生れのポルトガル人、年令五十才、イエズス会在会二十年以上、猫背で病氣勝ち。日本在住約十五年、日本語を非常によく理解し、府内在住。

バルテサル・ロペス司祭 ポルトガル人、年令四十五才、イエズス会在会十七年、いたつて健康。日本在住十年、日本語で告解を聴くことができる。口ノ津在住。

このように「日本語による聴罪師」としての役職にあつた司祭達の日本語理解力は必ずしも一様でなく、強いて優劣をつけるとすればバスターン・ゴンサルヴェス、バルテサル・ロペスの両司祭が最も優れ、ルイス・フロイス、ベルシヨール・デ・フィゲイレド、オルガンティーノの各司祭の順となるうか。このうちルイス・フロイス司祭の場合をとりあげてみたい。

同司祭は永祿六（一五六三）年七月横瀬浦に入港、有馬地方での布教に従事していたが横瀬浦焼打ちの戦乱をさけて度島にのがれ、熱病の発作に妨げられない時にはジョアン・フェルナンデス修道士とともに日本で書かれる最初の文法書を著わす企画を始め、動詞の変化と構文法を整え同時に辞書を部分的に編纂し始めた。しかし失火のため度島の会堂が焼け「われらが後にいたりて必要を感じ最も惜しむたるは、ジョアン・フェルナンデス修道士が数年来日本語にて書き綴りたる数巻の書籍を失つてしまふ」⁽¹¹⁾。ここではルイス・フロイス司祭は来日早々ジョアン・フェルナンデス修道士について日本語の習得にとめたことを挙げておきたい。因みに同修道士はサビエル師に同行来日通訳をつとめ「日本に來りしイルマンのうち日本語に通じたることイルマン・ジョアン・フェルナンデスに及ぶ者は一人もなく、また今後來るべき多数のうちにもなるべし」とされた⁽¹²⁾。程の評価を受けていたのである。続いて一五六四（永祿七）年ルイス・フロイス司祭は上京の命令を受け都の布教長となり十二年間五畿内で布教、一五七七（天正五）年には豊後に到着四年間布教活動にあたる。このようにもともと語学の才能に恵まれすぐれた指導者についてその基本から日本語を学び、五畿内での長年月にわたる布教経験をもったルイス・フロイス司祭ですら「日本語をほどほどに話せる、その司祭（ルイス・フロイス）は国主（宗麟）がデウスから賜った御恵みの偉大さについて

長々と話した¹³のであった。これは宗麟受洗直前の一五七八年のことであるから一五七九年の名簿で「日本語を非常によく理解する」とされていることについて字句通りに受けとるわけにはいかなないのであるまいか。

このように宣教師の日本語理解力は一般的に低く「日本語を知らざればなすこと多からざるがゆえに、日本語を学ぶことに大いに努力し¹⁴」普通勤務の余暇は、日本語の学習と書方に費し、住院においては日本語のほか話さず¹⁵という状態ながら満足すべきものにまではいたらなかったようで、巡察師ヴァリニャーノが来日しての第一印象は「日本の布教がまったく誤まった方法で行なわれており、最初に心を痛めたのはヨーロッパ人宣教師達が言語に通じていないこと¹⁶」であった。

当時全日本布教長であったフランシスコ・カブラル司祭は「才能のある者でも（日本語で）告白を聴けるようになるには少くとも六年はかかり、キリスト教徒に説教しうるには十五ヶ年以上を要する。異教徒に対する本来の説教などは全然考えられない¹⁷」として日本語や日本人の風俗習慣になじもうとしなかった。このような差別意識からする「誤まった方法」が巡察師ヴァリニャーノによって指摘されたわけである。

日本語の習得がヨーロッパ人宣教師にとって困難なことでは違いないが、困難であればなおそれを容易にするための方策がなければならぬわけで、カブラル司祭はその対応が充分でなかったといえるであろう。この点巡察師ヴァリニャーノはカブラル司祭とは全く異なり「日本語を学ぶことの容易なるは、われらが実験によりて発見したるところにして、もし努力すれば日本人と通常の談話をなし、告白をきき、また説教をもなすことは二年にして可能なることを認めたり¹⁸」といっていることに注目したい。この自信は一体どこから生れたのであろうか。巡察師自身日本語を知らなかっただけにそれはなおさらのことである。ここで「実験」といっていつているのは何を指すのであろうか、多分ラグーナ、カリオン両修道士のことをいっているものと思はれる。両修道士とも一五七七年に来日して在日二年、年令二十七才と比較的に若く、口ノ津に在住、ここでポルトガル語と日本語の両方がよくできた唯一人のジョアン・デ・トルレス修道士（日本人）¹⁹について日本語を習得した結果であろう。前記二名の修道士は「聴罪ができる程度に日本語を知っている」とされている。巡察師は口ノ津でこれらの修道

士に会っているのである。

因みにフランシスコ・ラグーナ修道士はスペイン人で、来日二年後の一五七九年末には叙階のためマカオに向かい翌年の半ばには司祭として来日、豊後においてキリシタンに対する布教と同僚イエズス会士の指導にあたったほか、津久見の住院^{レリアンテ}20²⁰にあって宗麟の霊的指導をつとめ、宗麟の死後豊後を退去した。

註 (1) ヨセフ・フランツ・シュツテ編「モニュメンタ・ヒストリカ・ヤポニア」(一九七五年 ローマ イエズス会史料編纂所) 七頁。

(2) ヨセフ・フランツ・シュツテ編 前掲書 五十七頁。

(3) ヨセフ・フランツ・シュツテ編 前掲書 百五頁、百六頁。

(4) ヨセフ・フランツ・シュツテ編 前掲書 百九頁から百十三頁まで。

(5) 一六〇五年一月十八日付 マカオ発アレサンドロ・ヴァリニャーノのイエズス会総会長補佐ジョアン・アルヴァレス宛て書翰(高瀬弘一郎訳・注「イエズス会と日本 一」一九八一年 岩波書店 二百六十九頁)。

(6) 一六〇三年三月二十三日付 長崎発ルイス・セルケイラのイエズス会総会長宛て書翰(親展)(高瀬弘一郎訳・注 前掲書 二百五十三頁)。

(7) 一五九六年十二月十日付 ゴア発フランシスコ・カブラルのイエズス会総会長補佐ジョアン・アルヴァレス宛て書翰(高瀬弘一郎訳・注 前掲書 百六十八頁)。

(8) イエズス会に入会して司祭への道を目指す者は、まず二年間の修練期間をおえ、三単式終生誓願を立てた上で修学修士となる。その後文法、古典文学、修辞学、哲学および神学を学びその後一年間の第三修練期を経て、最終的な階位を与えられることになるが、ここで選考によって単式公誓願を行なう者と盛式誓願を立てる者に分けられる。前者を修士補、後者を立誓修士という。立誓修士は最初は三盛式誓願を立てるが、その後さらに選ばれた者が四盛式誓願を行なう。この誓願は特命に関しローマ教皇への絶対的服従を誓うものである(「カトリック大辞典」一 一九四〇年 富山房 九十頁)。

(9) ヨセフ・フランツ・シュツテ編 前掲書 百五、百六頁。

- (10) ヨセフ・フランツ・シュツテ編 前掲書 百九頁から百十三頁まで。
- (11) 一五六四年十月三日〔永祿七年八月二十八日〕付、パードレルイス・フロイスが平戸よりインドに在る耶蘇会のイルマン等に贈りし書翰（村上直次郎訳 前掲書（上））。
- (12) 一五六一年十月一日〔永祿四年八月二十二日〕付、イルマンルイス・ダルメイダが豊後よりインド管区長パードレアントニオ・デ・クワドロスその他耶蘇会のパードレ、イルマン等に贈りし書翰（村上直次郎訳 前掲書（上））。
- (13) ルイス・フロイス 前掲書七 豊後篇二 百四十五頁。
- (14) 一五五八年一月十日〔弘治三年十二月二十一日〕付、パードレメストレ・ベルショール・ヌネスがコチンよりポルトガルの耶蘇会のイルマン等に贈りし書翰（村上直次郎訳 前掲書（上））。
- (15) 一五五九年十一月一日〔永祿二年十二月二日〕付、パードレバルテザル・ガゴが府内よりインドの耶蘇会のイルマン等に贈りし書翰（村上直次郎訳 前掲書（上））。
- (16) ヴァリニャーノ 前掲書 二百九十九頁。
- (17) ヴァリニャーノ 前掲書 三百頁。
- (18) 一五八〇年十月二十日〔天正八年九月十二日〕付、パードレロレンソ・メシヤが豊後より耶蘇会の総会長に贈りし書翰（村上直次郎訳 前掲書（下））。ロレンソ・メシヤは巡察師に同行、秘書をつとめていた。
- (19) ヨセフ・フランツ・シュツテ編 前掲書 百十三頁。日本人修道士ジョアンとある。
- (20) ヨセフ・フランツ・シュツテ編 前掲書 二百二十三頁。

三 日本人修道士の寄与と教育機関の設置

巡察師ヴァリニャーノはフランシスコ・カブラル司祭の「誤まった方法」を改め「実験」の結果に基いて日本語教育を主にした聖職者養成機関を設置した。これが修業期間二年の白杵の修練院である。修練院は院長ペドロ・ラモン司祭以下十六名、

そのうち修練生はポルトガル人七名日本人七名で、これにジョアン・デ・トルレス修道士がふくまれている。⁽²⁾日本語教育にあつたのはこの修道士であつた。彼は山口出身の孤児でイエズス会によって育てられ、既に述べたように日本語ポルトガル語の両方に堪能であつたが、布教に熱心なあまり哲学や神学を学ばなかつた。従つて日常的な日本語の指導はできたであろうが学識の点では劣つていた。一方府内のコレジオには養方パウロ修道士がいた。⁽³⁾彼は若狭出身の医師でヨーロッパの言語には全く通じていなかったが、日本の諸宗派に精通し豊かな学識に恵まれていたから説教や教理教育にすぐれ、コレジオが修練院とともに天草に移つてからも引続き教育にあたつており、イエズス会に寄与するところが大きかつた。彼の息子にあたるトウイン・ヴィセンテ修道士もまた父親に劣らずぐれた日本語教師として霊的な書物類の日本語への翻訳を行ない博識ぶりを發揮している。しかし養方パウロ親子のような例は他にみあたらず、総じてヨーロッパ人宣教師の日本語教育にあつた日本人側の指導者に優秀な人材をえられなかつたのではなからうか。

フランシスコ・サビエル師は「若し私達が日本語に堪能であるならば、多数の者がキリスト教に帰信するようになることは絶対に疑いを入れない」⁽⁴⁾とし「日本人が頗る熱心に私達のことを話し合つてゐるのが解るけれども、言葉を了解することができないから所詮私達は沈黙している外はない」⁽⁵⁾となげいたのは一五四九（天文十八）年鹿児島に上陸してはじめて日本の土を踏んだときのことであつた。その後四十年を経て日本語理解をすすめるための教育機関として臼杵に修練院、府内にコレジオが設置された。このような措置が講じられたのは、サビエル師を初代としてフランシスコ・カブラル司祭のあとをついだ第四代の全日本布教長ガスパル・コエリョの時代になつてからであつた。⁽⁶⁾

修練院、コレジオが設置されて十年経つた一五九二年の状況をみると、日本に在住するイエズス会士は外国人六十三名日本人六十九名の計百三十二名で、このうち外国人についてみると日本語が解らない者といくらかは解る者とを合せると二十八名、よく解る者十三名、非常によく解り説教、聴罪ができる者二十二名となつてゐる。これに対し日本人についてみると日本語以外解らない者三十五名と約半数を占め、ラテン語を学習中の者と一応これを終了した者が三十二名で、ポルトガル語が解るの

はさきに述べたジョアン・デ・トルレスと生月トマの二名の修道士のみであった。

巡察師ヴァリニャーノは「徳操と学問に必要な能力について日本人以上に優れた人々を知らない」としながら、日本人はラテン語の勉強を不承不承に、しかも強制されて行なうために僅かしか成果が挙っていない、ラテン語を身につけるためには子供のときから開始すべきであり、他の方法では習得できない、と概嘆している。⁽⁸⁾

日本人イエズス会士にとつても、語学の習得が大きな壁になっていたことがうかがえるのである。

註 (1) ヨセフ・フランツ・シュツテ編 前掲書 百五十八頁から百六十頁まで。なお一五八一年十二月二十日現在「府内の修練院」となっている。

(2) 一五五九年十月五日〔永祿二年九月五日〕付、イルマンジョアン・フェルナンデスがコチンの耶蘇会のコレジオの院長パードレメストレ・ベルシヨール・ヌネスに贈りし書翰（村上直次郎訳 前掲書（上））。

(3) ヨセフ・フランツ・シュツテ編 前掲書 百五十六頁。

(4) アルベ神父、井上郁二訳「聖フランシスコ・デ・サビエル書翰抄」下巻（一九七七年 岩波文庫）三十頁。

(5) 前掲書 四十三頁。

(6) ヨセフ・フランツ・シュツテ編 前掲書二百八十六頁から二百九十四頁まで。

(7) ヴァリニャーノ 前掲書 九十七頁。

(8) ヴァリニャーノ 前掲書 二百二十八頁。

（大分県総務部総務課県史調査員囑託 大分市上野六坊町四組）